

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

# 学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長

新保 淳

委員

石川 恭

委員

杉山 康司

委員

筒井 清次郎

委員

野地 恒有

委員

委員

審査期間 令和元年 5月 24日 から 令和元年 7月 13日

審査論文

幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる運動プログラムに関する研究

専攻 共同教科開発学専攻

氏名 内田 智子

生年月日 昭和 47年 8月 6日

提出日 令和 元年 5月 16日

本論文(内田智子氏「幼児期の運動指導が体力・運動能力向上につながる運動プログラムに関する研究」)は、幼児期の課外運動指導における一斉指導形態でありながらも子どもの主体性を尊重できる運動指導方法による運動遊びのプログラムを開発することにより、内発的動機づけを重視した多様な課題を経験させる運動指導であれば、指導者が関与しない自由遊びよりも体力・運動能力を高めることができることを実験により明らかにしたものである。

その研究の内容は3つの柱からなる。研究[1]では、一斉指導形態であり画一的運動プログラムによる指導と自由遊びを比較し、運動能力発達に与える影響を検討した。研究[2]では、一斉指導形態であり内発的動機づけを意識した指導と、何も指導しない自由遊びにおける運動能力発達に与える影響を比較し、内発的動機づけを意識した運動プログラムの有効性を検討した。研究[3]では、一斉指導形態でありながら内発的動機づけを重視した多様な課題を経験させる運動指導であれば、指導者が関与しない自由遊びよりも体力・運動能力を高めることができるのかどうかを検討した。

以上の研究によって得られた結果は次の通りである。

①画一的な運動指導では何もしていない自由遊び群のとの差はなく、体力・運動能力の発達を促進させていない。②内発的動機づけを意識した指導では、体支持持続時間1種目のみではあるが、体力・運動能力を促進させることが示唆された。③内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダーを用いた運動遊びは、25m走において、自由遊び群よりもラダー群およびサーキット群の方が早く走ることができるようになった。④内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダーを用いた運動遊びは、立ち幅跳びにおいて、自由遊び群よりもラダー群及びサーキット群の方が遠くに跳ぶことができるようになった。⑤内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダーを用いた運動遊びは、捕球においてサーキット群よりもラダー群の方が多く捕球できるようになった。⑥内発的動機づけを意識した指導におけるサーキット遊び及びラダー遊びは、跳び越しくぐりにおいて、男児では自由遊び群よりもラダー群の方が速くできるようになったが、女児ではサーキット群よりも自由遊び群とラダー群の方が速くできるようになった。

これらの結果から次のように結論づけた。一斉指導型でありながら内発的な動機づけを意識した運動指導において、子どもの運動遊びを用いた運動プログラムでは、体支持持続時間1種目のみではあるが、体力・運動能力発達を促進させた。さらに、一斉指導型でありながら内発的な動機づけを意識した運動指導において、運動コントロール能力を高めるための運動遊びを中心に運動プログラムを設定することで、25m走、立ち幅跳び、跳び越しくぐりといった「体を移動する動き」と、捕球の「用具を操作する動き」に発達を促進させた。したがって、調整力の臨界期とされている幼児期において、運動能力の臨界期を考慮し運動プログラムを検討するならば、幼児期は調整力に関わる運動コントロールを高める運動遊びを多く含めるべきであることが提言できる。

本論文は、先行研究から見た成果の妥当性と新規性、論理性、実験データ分析の客観性と緻密性、教科開発学研究としての適切性などの点から高く評価される。

よって、本論文は博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。